

小・中学生のための理科教育実践研究

— 実験教室「紅葉の秘密」を通して —

照井啓介^{*1}・武井隆明^{*1}・菊地洋一^{*1}・伊藤康夫^{*2}・黒田聡美^{*1}
高橋 治^{*3}・中村悟史^{*4}・村上 祐^{*1}

(2000年11月9日 受理)

Keisuke TERUI, Takaaki TAKEI, Yoichi KIKUCHI, Yasuo ITO, Satomi KURODA,
Osamu TAKAHASHI, Satoshi NAKAMURA and Tasuku MURAKAMI

A Research on the Teaching of Natural Science for School Children
and Junior High School Students

— Through the Practice of an Experimental Class 'Mystery in Turning-red' —

はじめに

日本の教育界・産業界等で「若者の理科離れ」が言われて久しい。¹⁻³⁾ この間、自然科学系各学会では、小・中・高の学校教育現場における理科教育の在り方や理科教員の養成問題などに多くの警告ないしは提言がなされてきた。^{4,5)} 最近でも、雑誌「科学」は「なぜ、(自然科学を)学ぶのか」を2号にわたって特集し、日本の教育行政で何が問題か、「理科離れ」にどう立ち向かうかなどを論じているほか、世界の教育水準からみた日本の科学教育のあるべき姿を提言している。⁶⁾ また、総理大臣諮問機関「科学技術会議」も、1994(平成6)年12月に「科学技術系人材の確保に関する基本指針について」を答申している。この中で、「我が国にとって次代の科学技術を担う人材の確保に努めることが急務」、「若者の科学技術に対する興味や関心を育てていくことが大切」との観点に立ち、「小・中・高校における探求活動や実践活動を重視した理科教育等の充実」、「大学・高専における理工系教育の魅力向上」などについて関係機関の積極的な取り組みを求めている。その方策として「科学技術を身近にとらえ考えるための多様な機会の提供」および「学校教育における創造的探求心の育成」を挙げ、具体的には「自然とふれあう機会の重視(自然は生きた理科教室であり、良き教師)」、「家庭への期待(科学技術についての親子の語らいのた

*1 岩手大学教育学部理科教育

*2 遠野高校 教諭(現職院生)

*3 岩手大学教育学部附属中学校 教諭

*4 区界高原少年自然の家 指導主事(現緑が丘小学校 教諭)

